タイトル：2023 年度 教育セミナー（第 19 回）
日時：2023 年 9 月 21 日（木）～24 日（日）
場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 3 階大会議室（303）

「サファヴィー帝国 3 代目君主エスマーイール 2 世による大ハリーフェ処罰（1576.6-7）に関する考察―同君主の政策に対する再評価の一環として―」
宍戸　遥弥（明治大学大学院文学研究科博士前期課程 2 年）

本セミナーに参加したことの最大の意義は多様な学問領域に属する院生・研究者と交流ができたことである。日頃拠点を置いている史学専攻アジア史専修の研究室には、地域・テーマにおいて様々な研究者が集っているものの、文献史学という手法の面では同質性が高く、対象に歴史的な視点からアプローチするという点では共通する部分が多い。反面、中東・イスラーム史を専門とする研究者は、学会では地域・文化圏を軸に成果報告を行う場面も多い。研究室の内外で環境に一定のギャップが存在するのである。その点、本セミナーは研究歴の近い院生どうしが中東・イスラームという共通項で互いの研究成果を報告しあう場面を提供しており、このギャップを埋めるうえで役立った。

このような環境のなか、自ら研究報告を行い、他の院生の報告を聞くとともに、様々な分野の先生から講義を受けたことで、具体的には以下のような経験が得られた。

まず自分の研究報告については、多様な研究者が集まるなかでの報告の機会を得たことで、準備段階から報告後の質疑応答に至るまで、研究成果を理解してもらうために必要な前提をどのように論じるかを改めて考えることになった。結果として、従来深く考えてこなかった研究史や用語の問題について目を向ける機会を得ることができた。また今回の報告を通じて、テーマおよび研究手法について、なぜそれを選択したのかを説明することの重要性を痛感することになった。

他の院生の報告からは、同じ地域・文化圏を対象としていても、問題意識や研究手法の相違によって見えてくる景色が大きく異なることを実感することができた。とくに現代社会を研究している院生の報告は、対象をどう捉えるかという点が大いに重視されていたため、史料という材料ありきで設計しがちな自分自身の研究のあり方を再考する手掛かりとなった。また質疑応答の時間が確保されていたことで、不明点・疑問点を探しながら報告を聞くよう心掛けることができた。このことは、畑違いの研究について深く理解する契機となった。また自分の研究報告における改善点を探すうえでも有用な経験であった。

講義は、ある意味での人生設計について考える機会となった。ここでいう人生設計とは、個別の研究成果の展開の仕方や、より大きな問題関心へのつなげ方である。本セミナーでの講義は、それぞれの研究者の人生や、長期にわたる研究蓄積のなかで洗練されてきた題材を扱っていたため、これから博士後期課程に進んで本格的に研究を進めてゆくなかでの方向性を形作るうえでの参考になった。さらに、中東地域・イスラーム世界という現

代でも様々な困難を抱える領域を研究対象とするにあたり、どのような問題意識をもって臨むべきかを今一度考える必要があると痛感した。